

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響  
—旧蔵書の調査を通じて

Influence des livres français sur l'œuvre de ENDO  
Shusaku – à travers sa collection privée

久松 健一

HISAMATSU Ken'ichi

研究のそもそものは、町田市民文学館から、遠藤周作の旧蔵書を目録にまとめる編集作業を依頼されたことにはじまる（\*注）。

\*この経緯について『遠藤周作と Paul Endo 一母なるものへの旅』（町田市民文学館、2007.9.29）に拙文を載せた。あわせて、作業の成果は『町田市民文学館蔵 遠藤周作蔵書目録（欧文篇）：光の序曲』（町田市民文学館、2007.9.29）として形をなした。なお、本研究の途中報告を兼ね「遠藤周作研究（創刊号）」（同研究会編、2008.9.29）に「遠藤周作の読書体験－旧蔵書（仏語文献）を眺めながら」を掲載した（たとえば処女小説『アデンまで』の冒頭部に明らかな仏語文献の影響が見られること、文体がフランス語の影響下にあることなどに言及）。「人文科学研究所個人研究、共同研究及び総合研究の取り扱いに関する内規」（第11条）に則り、本文中に「この論考は2008年度・明治大学人文科学研究所個人研究の恩恵に浴している」と文言を附している。

作家は書く人である。それとともに読む人でもある。書くためには読むことが必須で、読みを欠けば、よほどの例外を除いて、職業作家としての仕事は成り立たない。作品には、形をなす前提としての“読むこと”が隠れている。

この見えない部分に光をあて、遠藤文学への多様な書籍の影響をあれこれ探ろうというのが本研究。いささか気負ったテーマである。小説は書き手の人生体験から紡がれるもの、ややもするとそう短絡的に考えられがちだ。日本には、私小説という土壌、伝統もあるためか、作品は実体験を結晶化するものとの錯覚を生みやすい。素朴な読み手は主人公と作者とを同一視するが、両者に差がなければフィクションは成立しない。研究の世界には、実証という名の、実体験の重箱の隅ばかりをつつきかねない狭隘な領域もある。うっかりすると、「事実」と、事実にはない高揚感を伴う「真実」とを混交しかねない。遠藤は書いている。

自分が小説を書くようになったのは——多くの人が誤解しているように自分の人生体験からではない。人生体験という事実ではなく芸術体験という真実のおかげである。

むろん、彼の言う「芸術体験という真実」には、読書体験が含まれている。

では、遠藤周作の旧蔵書を前に、なにが見えてくるのか。まず、主たる調査対象である仏語文献が購入され、読まれた時期が問題だ。それは、彼の留学期間中が大半で、具体的には、世界大戦直後の1950.7.5.（マルセイユ着）から1953.1.12.（赤城丸にて帰国の途に着く）までの間である。いわば、遠藤の作家活動の準備期に相当する。ちなみに、彼の処女作『フランスの大学生』が刊行されたのは帰国して半年後、『白い人』により第33回の芥川賞を受賞したのは翌年の1954年のことである。

書くことを生業とした当初、遠藤はフランス留学体験を背景にエッセイや小説を書いた。「日記」によれば、小説家として生きようと決めたのも、欧州に向う船の上、朝鮮戦争が勃発した日のことである。とすれば、海の方こうで購入し、読みふけた蔵書が、そのまま初期作品を産む御柱となったと考えて間違いなさそうだ。

具体的な影響関係について裏付を持った資料との絡みを見てみたいとの思いから、本年度は『作家の日記』ならびに『ルーアンの丘』に記述された書名（読書の履歴）と蔵書を照合、時系列でそれを一覧にし、必要な事項（書き込みやアンダーラインなど）を整理した。

あわせて書物以外にも目を向け、遠藤を取り巻く人々からの影響、たとえば幼少期の母親からの心理的なそれ、あるいは留学前の吉満義彦や佐藤朔、堀辰雄等々からの精神的・物質的それを視野におさめる必要があると考え、積極的に文献を集めた。

また、“書物群からの「影響」”を考える前提として、影響の射程を広角的にとらえるべきものと判断、その意味から遠藤周作に限らず、複数の作家たちが書籍や人物から受けた“影が形に従い、響きが音に応じる様”を誠査、点検することにした。ところが、これはなかなか難儀で、手をつけてはみたものの、途中、方法論が二転三転。現状はノートへの恣意的な分類にとどまり、着眼が印象批評から脱していない恨みなしとしない。来年度に向けての反省としたい。

最後に、懇望方、あえてこの報告の場に以下を追記しておきたい。

実は、遠藤周作に関する資料の大半、それは長崎の風光明媚な地に建つ遠藤周作文学館に収蔵されている。ただ、文献保護という大義のためであろうが、遠方まで足を運んでも手沢本を縦覧することはかなわず、事前に写真撮影された書き込み箇所を、パソコンを通じて閲覧するという隔靴搔痒の対応を強いられる。こうした待遇しかのぞめないなら、いっそ会員制のネットなどを通じた検索を可としたらどうか。時間をかけ、空間を移動する利用者の手間をはぶくのが今日の配慮と愚考するが、いかがなものか。無論、そうなれば、交通の便のよろしくない場所に建てられた文学館の存亡にかかわる事態と相成る。それを避ける意図もあって、不本意ながらこうした不自由を来館者に課しているのであろう。しかし、遠藤が生きていたら、こうした門前払いならぬ、文献払いを、はたして好ましいとしたらどうか。大いに疑わしい。